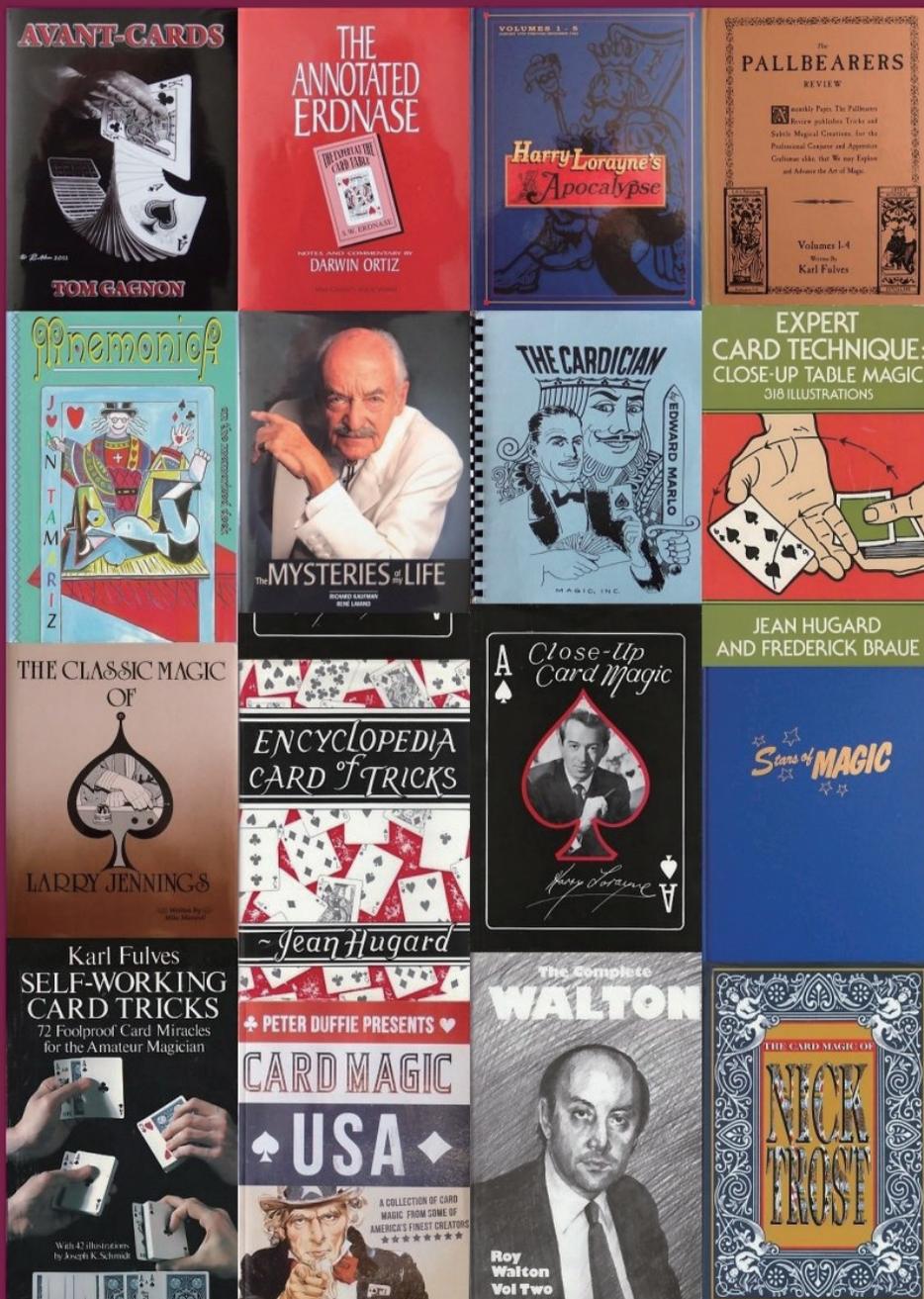


Card Magic Magazine



カードマジック徹底研究

シャフルボワード

“Card Magic Library” 第3巻 186 ページに、’3つの予言’が解説されています。その作品は、アリ・ボンゴがレクチャービデオで説明している方法を参考にして、私がバリエーションを考えたものです。予言の方法だけの改案です。その私のやり方は、Mr. マリックがテレビで演じたこともあります。

今回シャフルボワードを特集するにあたって、“Card Magic Library” 第3巻に書いた方法をよりも、演出的にはもっとパワフルな演じ方を私自身が考えていたのを見つけました。“Card Magic Library” に書いたのよりも7年もまえの作品です。トリックの構造自体は“Card Magic Library” のバージョンと同じですから、現象だけを書きます。

パワフルな予言

= 加藤英夫、1998年12月1日 =

* 現象 *

あらかじめ、予言の書いてある紙がテーブルに置かれます。

デッキが2分されて、マジシャンと客が半分ずつ裏向きに持ちます。客がマジシャンのカードの持っているカードから半分ぐらいを取り、表向きにして裏向きの手元のカードと混ぜ合わせます。つぎにマジシャンが客のカードの上から半分ぐらいを取り、ひっくり返してマジシャンのカードと混ぜ合わせます。これを数回繰り返します。そうすると、お互いのカードは裏と表のカードがよく混ざった状態になります。客のカードとマジシャンのカードを重ねます。

マジシャンは予言の紙を客に渡し、第1の予言を読ませます。それには、「第1の予言、裏向きのカードと表向きのカードが混ざっている」と書かれています。これはジョークですから、観客は笑います。

つぎの予言には、「第2の予言、裏向きのカードが19枚ある」と書かれています。客がデッキから裏向きのカードを抜き出して数えます。予言通り19枚あります。表向きのカードはわきに捨てられます。

つぎの予言には、「第3の予言、絵札が6枚ある」と書かれています。絵札を抜き出して数えると、予言通り6枚あります。絵札はわきに捨てられます。

つぎの予言には、「第4の予言、偶数のカードは9枚ある」と書かれています。偶数のカードを抜き出させると、予言通り9枚あります。偶数のカードを捨てます。

「第5の予言、残りのカードは4枚のAである」。残りのカードを受け取り、広げると、予言通り4枚のAです。

マジシャンは予言の裏側に何か書かれているのに気づき、それを読みます。「最後の予言、つぎに4枚のAのマジックが行われる」。マジシャンは「それでは予言通り、フォーエースのマジックをやります」と言って、フォーエースのマジックを演じます。

プレデックアビリティ

= アルド・コロンビーニ、“プレデックアビリティ”、1996年 =

1999年の2月のことです。L&Lパブリッシングに注文しておいた書籍が到着しました。その中にサイモン・アロンソンの“バウンドトゥープリーズ”アルド・コロンビーニの“プレデックアビリティ”が含まれていました。偶然の一致とはこのことでしょうか。この2冊には、アリ・ボンゴのレクチャーで演じられたマジックのルーツが書かれていたのです。

アルド・コロンビーニは、彼が考えたマジックを他人の本に書かれたことと、バリエーションを彼に対するクレジットなしにレクチャーで使われたことに対し、ルーツを正すためという目的のために“プレデックアビリティ”を出版しました。本とはいえない8ページの小冊子です。彼がどうしてたったひとつの作品のために同書を出版したのか、前書を翻訳して紹介します。

話せば長くなるので、なるべく手短にお話ししましょう。サイモン・アロンソンが“シャフルボワード”というマジックを出版したのは、1980年のことだと思います。当時、私はイタリアで暮らしていましたが、このマジックを読んだ瞬間、このマジックは強力で信じられない現象だと直感したものでした。

2,3年後に、私はこのマジックに対するひとつの演出を思いつき、シャフルの仕方の異なるハンドリングを考えつきました。私はその見せ方をしばらく私自身の内にとどめたのち、ヨーロッパやアメリカのマジシャンに見せ始めましたが、彼らの反応は、私のプレゼンテーションやハンドリングはものすごい、というものでした。

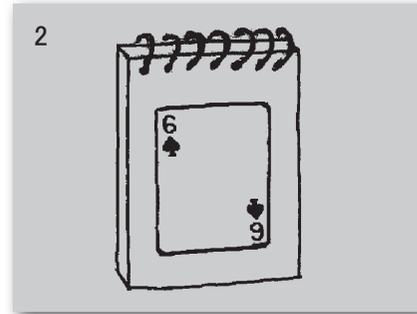
ところが最近になって、私の演じ方が、ジョン・レイチェルバウマーの“M.O.”という雑誌に、考案者不詳ということで掲載されました。さらに、アリ・ボンゴが彼のレクチャーの中で、このマジックを何のクレジット表示なしに演じていることを人からききました。

このマジックのいちばん初めのコンセプトは、ボブ・ハマーに属するものです。そのコンセプトがサイモン・アロンソンによって取り上げられ、驚くべき傑作に発展させられました。彼こそこのマジックの基本的手順のクレジットを捧げられるべき人です。

* 準備 *

赤いカード 15 枚、クラブのカード7枚、スペードの6、以上 23 枚をよくシャフルしてデッキのトップにセットします。23 枚目のカードが何であるか記憶し、キーカードとします。

縦に開くタイプのメモパッドを用意し、最後から 2 ページ目に、図 1 のように “ つぎのカード以外は ” と書き、最後のページにジャンボカードのスペードの6を貼ります。図 2。



* 方法 *

予言を書くと言って、パッドの最初のページを開き、“裏向きのカードが 23 枚ある”とペンで書き、そのページを破って 1 人目の客に持たせます。

つぎのページに “ 赤いカードが 15 枚ある ” と書いて、そのページを破って 2 人目の客に持たせます。

つぎのページに “ 黒いカードはすべてクラブである ” と書き、そのページを破って 3 人目の客に持たせます。

デッキを取り出し、表向きに両手の間か、テーブルの上に広げます。カードを閉じて取り上げ、セットした 23 枚と他の 29 枚が混ざらないようなシャフルを行います。ヒンズーシャフルが適しています。セットした 23 枚は、それらの中で混ざっても問題ありません。

カードを表向きに広げて、キーカードから分けて、下の 23 枚 (バック側) を右の客の前に裏向きに置き、上の 29 枚 (フェース側) を左の客の前に裏向きに置きます。2 つのパケットはかなり離して置き、のちのハンドリングで 2 つのパケットの間の位置を、' 中間の位置 ' と表現することになります。以下の説明で右のパケットとか左のパケットと表現しますが、あなたから見たものとして書きます。

右の客に指示します。右のパケットから適当な枚数をカットして、中間の位置に置かせます。そして、カットされたのが何枚であるかわかるはずがないことを強調します。

中間のポケットを表向きに戻します。このポケットを左のポケットとシャフルさせます。シャフルしたカードを左の位置に置き、そのポケットから適当枚数をカットして中間の位置に置かせます。

中間の位置のポケットをひっくり返し、右のポケットとシャフルさせます。シャフルされたポケットを右の位置に置かせます。

以上のプロセスを、カードが滅茶苦茶に混ざったと納得するまでやらせます。そして最後に、左のカードを全部取りあげ、ひっくり返して右のポケットの上に重ねます。

カードを取り上げて、両手の間に広げて両面を見せますが、最終的に 23 枚のセットしたカードが見える方を裏向きにします。

第1の予言を持っている客に、その予言を読んでもらいます。そして客にカードを裏と表に分けさせ、裏向きのカードが 23 枚あり、予言が当たっているのを示します。表向きのカードをわきに捨てます。

第2の客に予言を読ませます。赤と黒のカードを分けさせ、15 枚の赤いカードがあることを示します。

第3の予言を読ませます。“すべての黒いカードはクラブです”という予言と違って、スペードの6が混じっているに驚く演技をします。そして“つぎのカード以外は”というページを見せます。さらにページをめくって、スペードの6が描かれているのを見せます。

*** 備 考 ***

英語では第3の予言が“All the black cards are Clubs”で、そのつぎのページに書かれているのが、“Except the”で、さらにページをめくるとスペードの2が現れます。日本語では上記の通りではピンとこないので、“すべての黒いカードはクラブです”のページのあとに、“スペードの6以外は”とした方がよいでしょう。

シャフルボワード

= サイモン・アロンソン、“シャフルボワード”、1980年 =

*** 準 備 ***

トップから 21 枚目から 33 枚目に、Aから順番にKまでセットしますが、マークはなるべくバラバラになるようにします。

*** 方 法 ***

2人の客に手伝ってもらいます。カードを取り出し、表を上にして広げて見せます。中央のセット部分が乱れないようにフォールスシャフルしてもかまいませんが、それほど重要な意味を持ちません。

カードを閉じ、裏向きにテーブルに置き、右の客に3つのポケットにカットさせます。あなたから見て右にトップ部分、左にボトム部分、中間に中間部分が置かれるようにします。

右の客に右のポケットから、左の客に左のポケットから、任意枚数をカットさせ、お互いがカットしたカードを交換させます。そして交換したカードを表向きにして、右の客は右に残っている裏向きのカードと、左の客は左に残っているカードとシャフルしてもらいます。表向きのカードが何枚であるか、誰にもわからないことを強調します。

右の客のカードを中間に残っている裏向きのポケットの上のせさせます。それら全体を左の客のカードの上のせてそろえてもらいます。

カードを全体を左の客の前に置かせ、先ほどは3つのポケットに分けたので、こんどは2つに分けてくれと左の客に頼みます。そしてカットした上半分をひっくり返して、残りの下半分とシャフルさせますが、上半分をひっくり返したとき、そのフェースに見えたカードの数を記憶します。その数をXとすると、心の中で20にXを加えます。その答えの数が、現在デッキの中で表向きになっている枚数を示しています。

いままでのプロセスを復唱し、裏向きのカードと表向きのカードがどのように混ざってるか、まったくわかるはずがないことを強調します。そしてドラマチックに表向きのカードの枚数を宣言し、客にカードを分けてディールさせ、それが当たっていることを示します。

* 備考 *

この作品の備考においてサイモン・アロンソンは、このマジックが完成するにいたる経過を詳細にトレースしています。

アロンソンがこのマジックを考える出発点になったのは、デヴィッド・ソロモンが彼に見せた、エドワード・マルローの "But What About My Number?" (雑誌 "リンキングリング" 1974年7月号) というマジックでした。

さらにそのエドワード・マルロー作品は、チャールス・ハドソンの "Reversification" (雑誌 "リンキングリング" 1974年1月号) のバリエーションであり、それはさらに名称不明のボブ・ハマー作品のマジックのバリエーションであると、アロンソンは述べています。

アロンソンの指摘したマルローとハドソンの作品は、原著を確認いたしましたが、あまりに複雑過ぎて、ここで説明するのにもためられるものでした。アロンソンが最後に名称不明だというハマー作品が、いったいどの作品のことなのだろうか、というのがずっと頭にひっかかったままになりました。

*** 余 談 ***

アルド・コロビーニは、“プレデックアビリティ”の前書において、はっきりとコロビーニがアリ・ボンゴに無断で真似されたというようなことを書いています。私はボンゴのレクチャービデオで演技を見ていますが、ボンゴの演技がコロビーニの演技の真似をしているようには感じませんでした。ボンゴのやり方の方が、かなり優れているように思われました。

コロビーニのやり方では、つねにテーブルの中間の位置でシャフルが行われます。カードのひっくり返しが左右シンメトリックに行われるので、操作がいかにもメカニカルな感じがして、その操作が何かの意味がありそうな感じを与えます。

もうひとつボンゴのやり方の決定的な特徴は、テーブルを使わないので、スタンドアップの演技として演じられる点です。そして、たたまれた紙をつぎつぎと広げて予言を見せていくやり方にもオリジナリティがあります。

“プレデックアビリティ”を読んでしばらくしてから、“セルフワーキングマジック事典”（1999年、東京堂出版）において松山光伸氏が、アリ・ボンゴのやり方を当人の承諾を得て解説し、ボンゴの話も書かれているのを見つけました。

それによると、アリ・ボンゴがレクチャービデオで演じているときは、'Ludow's Card Trick' と紹介しており、一般の観客に演じるときには、'The Most Boring Card Trick in the World' と言っているとのこと。アリ・ボンゴは、もともとフランスのリュドウが演じていたマジックを、予言の方法を変え、最後に失敗したと見せる演出を加えたと述べているそうです。

このように、マジックの考案者をめぐっては、いくつもの論争があります。最近では、アル・コランの 'レイジーマンズカードトリック' をめぐって、ハリー・ローレンが “クロースアップカードマジック” に解説したのは、アル・コランがローレンに見せたバージョンに、ローレンが演出を考えて加えたものだと述べて、物議をかもし出しました。それは何人かのマジシャンから証拠的情報が寄せられて、否定された形となりました。

アリ・ボンゴに真似されたと言って、やり方を出版してしまうというのは、まさかであらう話ではないでしょうが、色々な情報が集まると、一方の主張だけを鵜呑みにはできなくなります。まるで領土問題において、無理に実効支配してしまうということを彷彿とさせます。マジシャンには、そんな争いをしてほしくないものです。

イクアライザー

＝ハリー・ローレン、"トレンドセッターズ"、1990年＝

* 方法 *

シャフルされたデッキを26と26枚に二分します。そして、両方のパケットを表向きにスプレッドして、「よく混ぜています。カードが順番に並んでいたりしませんし、赤と黒もよく混ぜています」と言いつつ、セリフに合わせてカードの一部を広げたりして、混ぜていることを強調します。その説明的操作中に、一方のパケットに含まれている赤のカードを密かにカウントします。

両方のカードを閉じて裏向きにし、赤の枚数をカウントしたパケットを、1人目の客に渡し、他方を2人目の客に渡します。

2人の客にそれぞれのカードをシャフルさせ、カードをカットして、持ち上げたカードを交換させ、交換したカードをひっくり返して手元のカードとシャフルさせます。この操作を何回か繰り返してもらいます。

そして2人目のパケットをひっくり返して2人目のパケットに重ねさせます。この状態でデッキの中に26枚の裏向きのカードがあるのがわかっています。そしてその裏向きのうちの何枚が赤のカードかもわかっています。まず裏向きの枚数を宣言し、裏向きのカードを分けて数え、それが当たっていることを示します。それからその中にある赤の枚数を宣言し、赤と黒を分けさせて、当たっていることを示します。

コントロールドシャフルボワード

＝サイモン・アロンソン、"シャフルボワード"、1980年＝

サイモン・アロンソンの'シャフルボワード'の原案では、デッキの中央にシーケンシャルに13枚のカードをセットしておくことにより、相手がまん中あたりでカットして表向きに返したとき、シャフル後の裏表の枚数が認知できる、という巧妙性と不思議さの原点があります。

その魅力を捨て去ることはありますが、その代償として、シャフルされたデッキで演じられる方法を、アロンソンは同時期に発表しています。

* 方法 *

何らかの手法によって、トップから23枚目のカードをクリンプします。あらかじめクリンプしておいたカードを23枚目にコントロールしてもかまいません。

1回目のシャフルは原案と同じく、デッキを裏向きにテーブルに置き、右の客に3つの組にカットさせ、あなたから見て右にトップ部分、左にボトム部分、中間に中間部分が置かれるようにします。

右の客に右のポケットから、左の客に左のポケットから、任意枚数をカットさせ、お互いがカットしたカードを交換させます。そして交換したカードを表向きにして、右の客は右に残っている裏向きのカードと、左の客は左に残っているカードとシャフルしてもらいます。表向きのカードが何枚であるか、誰にもわからないことを強調します。

右の客のカードを中間に残っている裏向きのポケットの上ののせさせます。それら全体を左の客のカードの上ののせてそろえてもらいます。

原案ではここで2回目のシャフルを行うとき、客にカットさせていますが、「もっとよく混ぜておきましょう」と言って、マジシャンがカットします。クランプカードの下からカットするのです。そして上半分をひっくり返し、下半分とリフルシャフルします。

その結果、デッキの中の表向きのカードは 23 枚となりますので、それを効果的に当てます。

* 備 考 *

“シャフルボワード”は 1980 年に発行されましたが、1994 年になってアロンソンは、それまでに彼が発行した小冊子や雑誌に発表したものなどを集めて、“バウンドトゥープリーズ”という本を発行いたしました。その中で彼はつぎのように書いています。

1990 年にハリー・ローレインが発行した“トレンドセッターズ”の中で、彼は‘シャフルボワード’の彼のバージョンを、‘イクアライザー’と題して書いています。私が 1980 年の段階で、スタック不要の即席的なバージョンを書いているのに、彼はスタックを不要とした即席バージョンを考えたと主張しているのに驚きました。

彼のやり方は、偶然かも知れませんが、マジシャンが特定の枚数から分けてシャフルするというやり方をしていました。私はハリーに手紙を書いて、その類似点を指摘しました。ハリーはその点を認めました。彼は私の原案を人から見せられて、彼のバージョンを考えたとのこと。彼は私が書いたものを読んだことはなく、私が即席バージョンを考え済みであったのを知らなかったのです。

そのようにアロンソンは書いていますが、私はローレインバージョンに、アロンソンが 1980 年の時点で考えていなかった重要な要素があるという点を、ここで明確に指摘しておきたいと思います。

第一にシャフル操作の違いです。アロンソンは、デッキを 3 つに分けて、上と下のポケットで 2 人の客に交換およびひっくり返し、そしてシャフルの操作を行わせますが、ローレインは 2 人の客に一部をカットさせ、引く繰り返して交換させ、そしてシャフルさせています。これはまさに、その後のボンゴやコロンビーニのシャフル操作の原点です。

そしてもうひとつ、表向きのカードの枚数を当てたあとに、赤いカードの枚数を当てる、という二重現象にしたのをローレインバージョンが初めてです。これものちの連続予言現象につながる、まことに重要な要素です。

ということで、ローレインの'イクアライザー'は、たいへん重要な作品です。このことを明記しなければ、歴史を正確に記録したとは言えません。

フェイスアップフェイスダウンプリディクション

= ボブ・ハマー、"ハーファダズンハマー"、1940年 =

アルド・コロンビーニが"プレデックアビリティ"の前書きで、"このマジックのいちばん初めのコンセプトは、ボブ・ハマーに属するものです"と書いているので、私はハマーの'エイティーンカードミステリー'が'シャフルボワード'の原点であるかもしれないと思っていましたが、後日ジョン・レイチェルバウマーカバマーの"カードフィックス"(1990年)の中に、"What About Hummer's Number"というマジックが書かれていて、その前書を読んで、それが'シャフルボワード'の原点であることがわかりました。

* 方法 *

予言として、紙に「20枚の表向きのカード」と書いておきます。

相手にデッキを渡し、よくシャフルさせます。そしてあなたは後ろを向きます。デッキからだいたい半分ぐらいをカットしてテーブルに置かせます。そのポケットをさらに半分に分けさせます。残りのカードは、とりあえずわきに置いておきます。

テーブル正面にある2つのポケットのひとつを取りあげさせ、その中の任意枚数を表向きにして、残りの裏向きのカードとシャフルさせます。そのポケットをテーブルに置き、もうひとつのポケットを取らせ、さきほどと同じ枚数のカードを表向きにして、残りの裏向きのカードとシャフルさせます。

いま手に持たれているカードを、わきに置いてあるデッキの残りのカードに重ねさせ、後ろ手にあなたの手に受け取ります。

相手の方に向き直り、「表のカードが合計で予言された枚数になるように、何枚かの向きを変えます」と言って、上から20枚を右手にカウントして、その20枚をリバースして残りのカードに重ねます。

前に向き直り、手に持っているカードをテーブル上のポケットに重ねます。ここで予言に書かれていることを見せます。相手にデッキを持たせ、表向きのカードを数えさせると、予言通り20枚あります。

ウェイトアンティルダーク

= ジョン・バノン、"ディアミスターファンタジー"、2004年 =

この作品の解説の前書を読むと、ジョン・バノンの'シャフルボワード'に対する考え方が明確にわかり、演じ方を考える上でたいへん参考になります。したがって、バノンがこの作品について書いた、すべてを忠実に翻訳して収録することにいたしました。

まず、サイモン・アロンソン考案の'シャフルボワード'について考察しておきましょう。そしてアルド・コロンビーニのマルチ予言の演出についても確認することにいたします。それらについて、いっしょによく考えてみましょう。

'シャフルボワード'のコンセプトは、客にカードを裏と表で自由に混ぜたと思わせて、最後には決まった枚数の、しかも最初からわかっているカードが裏向きになっている、というものです。これは驚異的な結末です。おそらく驚異的過ぎる結果です。この現象が予言という形で演じられたとき、やり過ぎかもしれませんし、完全過ぎると言えるかもしれません。

色々なことが予言通りであるという結果は、①それは予定されていた結果であること、②結果はいつも同じであること、③その結果は自動的もしくは数理的に起こること、というようなことを、観客に感じさせる可能性があります。

そのようなことを観客に感じさせないためには、どのような構成をすればよいでしょうか。それが問題になってきます。

私はこの問題について何年も考え続けてきました。そんなことを考えずにほっておけばよいかも知れませんが、'シャフルボワード'は忘れるには素晴らし過ぎるマジックなのです。はたして自動的に起こるか数理的に起こることだと、観客に感じさせない見せ方はないのでしょうか。それが頭から離れませんでした。

そして数年まえに、最後の予言がマジシャンの間違いを逆転させるという演出に出会いました。そのコンセプトはしっかりしたもので、インパクトの強いものでした。それ以上素晴らしいアイデアは出ないだろうと感じて、ほとんどその時点でこの問題について考えるのをやめようと思いました。でもしかし、心に焼きついたこの問題は私を解放してくれませんでした。そしてとうとう、それがひらめいたのです。

続けて予言が当たっていくというのは不思議で驚異的なことです。でもマジシャンがいっさいカードを見ないで、カードの状態を当てるという現象としたら、それもまた驚異的であるはずで

あなたはどう思いますか。目隠してやるなんて、と思いませんか。マジック用の目隠しは、どうせ透けて見えることは多くの人が知っています。では、ダーウィン・オルティズのアイデアはどう

でしょう。マジシャンの背後に客を立たせ、両手で両目を覆わせるやり方です。手で目を覆えば絶対に見えないことは、誰でも知っています。とにかくシャフルホセワードでは結果が正確にわかっているのですから、見える必要なんてないのです。

この手順は透視術の実験という演出で行うものです。あなたの直感でリアルタイムに状態を感じているように演じますから、結果はその都度違うものであるように見えます。見た結果があらかじめ決められたものだと、観客に感じさせないような工夫がされています。

しかしながら、私はアルド・コロンビーニの、間違いを逆転させるというキッカーエンディングは残すことにしました。透視術として進められてきたものが、突然マジシャンが予知していたという事実を見せることが、驚きと面白さの妙味を与えてくれるからです。

はてさて、そのようにして完成した熟慮の結論は、はたして考え過ぎでしょうか。多くのマジシャンがこのやり方に納得しないかもしれません。しかしながら、私は'シャフルボワード'を演ずるとしたら、他のやり方はしないでしょう。

* 現象 *

観客にとって信じられないかも知れないが、マジックはときには失敗することもあり、つぎのマジックはとくに難しいものなので、失敗に備えて、あることが書かれた紙を用意したと言って、紙を取り出してわきに置きます。

マジシャンはそう言ったものの、失敗なしに演技を進めます。客がデッキをつつつかのパイルに分けて、そのうちのいくつかのパイルをひっくり返します。そして裏と表のパイルをシャフルします。その結果、デッキは裏向きのカードと表向きのカードがでたらめに混ざってしまいます。その間、マジシャンはいっさいカードに手を触れません。

マジシャンは透視術の実験をすると告げます。見えないものを見ることに挑戦するというのです。別の客にマジシャンの後ろに立たせ、両手でマジシャンの両目をふさがせます。本当にマジシャンは何も見えない状態になります。

マジシャンはデッキを受け取り、両手の間に広げ、しばらく精神集中したあと、デッキを最初の客に戻します。マジシャンはここで、混ざったデッキの中の裏向きのカードは22枚であると宣言します。

客がデッキから裏向きのカードを抜いて数えると、宣言通り、22枚あります。

マジシャンはつぎの裏向きのカードを受け取って、両手の間に広げて精神集中し、裏向きのカードのうち12枚は赤いカードだと宣言します。また客が赤いカードを抜き出して数えると、それが当たっています。

残りのカードを客に表向きに広げさせ、マジシャンはその上で手をかざして、何かを感じ取ろうとします。そして残りの黒いカードは全部クラブのカードだと告げます。そして目を覆っている客の手をどけさせます。

マジシャンは最後に残っているカードを見て驚きます。マジシャンは最後に間違っていたのです。すべてクラブではなく、1枚はスペードの2なのです。「そうですか全部スペードでしたね。クラブの2以外は」と言ってから、「このような緊急事態のためにこちらの紙を用意しておいたのです」と言って、わきに置いてある紙にかいてあることを客に読ませます。それには「スペードの2以外は」と書かれています。

* 準備 *

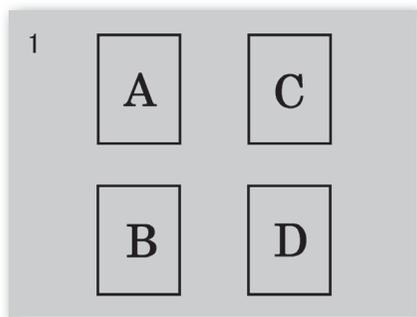
「スペードの2以外は」と書いた予言を用意します。あなたの名刺の裏面に書けばよいでしょう。ノーマルデッキから適当な12枚の赤いカード、適当なクラブのカード9枚とスペードの2を抜き出します。これらのカードをよくシャフルしたあと、残りの30枚のカードの上に重ねますが、間に予言のカードをはさんでおきます。

* 方法 *

デッキを取り出してリボンスプレッドします。予言のカードより右のカードを右に分け、左のカードを左に分けますが、そろえてしまうのではなく、広がったままずらすだけです。あくまでも予言カードに注目を集めます。

そして現象説明に書いたように、名刺が予言であるというようなことは言わず、あくまでも緊急用のカードであり、必要になる場合もあるし、必要ない場合もあると説明します。

これからの実験に相手に手伝ってもらいたいと言いながら、右と左に分けたカードをそれぞれそろえます。右のポケットは準備した22枚です。左はその他のカードです。以下の操作説明の上で、テーブルの位置を図1のようにA、B、C、Dと呼ぶことにします。



左にあるポケットを相手に渡してシャフルさせ、それを2組にカットさせ、それらを図1のAとBに置かせます。同じように右のポケットもシャフルさせ、2組に分けてCとDに置かせます。それからAとDのポケットを表向きにさせます。

相手にポケットAとポケットCを、そしてポケットBとDをシャフルさせます。その結果裏と表が混ざったポケットADとポケットBCができます。

つぎにパケットACかパケットBDをひっくり返させてから、2組をシャフルさせます。そのときもしも相手がパケットACを返してシャフルしたのなら、シャフル後に全体をひっくり返させますが、パケットBCの方を返してシャフルした場合は、シャフル後はそのままにさせます。

相手が自由にカットしたりシャフルしたにもかかわらず、デッキは裏向きのカードが22枚あり、それらは12枚の赤と11枚のクラブとスペードの2で構成されています。

このように裏と表がでたらめに混ざったと思われたデッキによって、透視術をやってみせるわけですが、ダーウィン・オルティズの手法によってそれを盛り上げます。(出典：“カードシャーク”に解説されているブラインドエーゼズ)。別の客にあなたの背後に立たせ、両手であなたの両目を覆わせます。これは布などで目隠しするよりも効果的です。

デッキを受け取り、カードを左から右に広げて送り、そして相手に返します。あなたの透視力が正しければ、裏向きのカードが22枚あると告げます。相手にデッキを裏と表のパイルにディールさせ、裏向きのカードが何枚あるかを声を出して数えてくれと言います。あなたの宣言通りの枚数です。

あなたは目を覆われているのですから、あなたは表のカードから何のヒントも得られないのは明白です。裏向きのカードを受け取り、左から右へ広げて送ります。そして相手に返します。その中に赤のカードが12枚あると告げ、相手に表向きに赤と黒にディールして、赤のカードを声を出して数えてくれと言います。またもやあなたの宣言が当たっています。

黒いカードを受け取り、その上に手をかざし、自身を持ってそれらがすべてクラブのカードだと告げます。相手にカードを渡して調べさせます。背後の客にあなたの両目から手を離させます。そして全部クラブであったかどうかたずねます。相手はスペードの2が混ざっていると告げます。

「そうですか全部スペードでしたね。クラブの2以外は」と言ってから、「このような緊急事態のためにこちらの紙を用意しておいたのです」と言って、わきに置いてある紙にかいてあることを客に読ませます。

* 備 考 *

このバージョンのシャフル操作は簡略化されています。アロンソンの原案ではもっと複雑な操作をさせていますが、原案を読んで比較してみてください。このバージョンのシャフル操作は、複雑でよく混ぜられた感じは犠牲にしているものの、説明の仕方の簡単さ、演技時点の短縮化、間違いの起こりにくさなどを実現しています。

私は以上のバノンの解説を読んで、「本当にこれでシャフルボワードの持つ不思議さが表現できるのだろうか」と疑問に思いました。マジックフォーラムにおいてこのバージョンを効果的だと言う人もいますから、マジックとして成立しないわけではないのかもしれませんが。

しかしながら私は何となく疑問が残ります。バノン自身の言葉を借りれば、シャフルの操作を簡略化することによって、演技時間の短縮かや間違いの起こりにくさの代わりに、“徹底的にカードを混ぜた”という、’シャフルボワード’の持つ魅力を捨てているのではないかと。

その点についての結論は、実演経験がないので保留とします。しかしながら、彼がダーウィン・オルティズの手法で目を隠させることについては、必ずしも不思議さを上げているとは思いません。

目を覆わせるのは、シャフル操作が終わったあとです。目で見ているからと言って、そろっているカードの中のカードの状態がわかるわけがありません。サイキックに当たるとしても、デッキの上に両手をかかげて透視の演技をすれば、サイキック的な演出は成立します。

紙に書かれた通りの結果になるから、最初から結末が決まっていると思われると言うのなら、見えないはずなのに結果がわかってしまうなら、やはり最初から結末が決まっていると思われるのではないのでしょうか。

そもそも黒いカード 10 枚のうち 9 枚がクラブということ自体が、あまりにも意図的であり、不自然です。これはコロムビアやボンゴのバージョンについても言えることです。

最後に、’シャフルボワード’をサイキックに演ずるということを考察しておきましょう。バノンのようなサイキックな演じ方は、サイキックエンタテイナーにとっては適したやり方であることは間違いありません。

少なくとも私は、マジックをサイキックに演ずるというのは極力避けます。サイキックな演じ方というのは、自分が不思議さを生み出していると主張するものです。私は、私が特別な能力を持っていると演ずることは、私がマジックを演ずる機会、環境において、観客との関係を良好なものにするのに役立ちにくい、ということを経験から学びました。

私のマジックショーにおいては、私が主役ではなく、演じられるマジックが主役です。ですから’シャフルボワード’を演じるときは、私がカードの状態を当てるのではなく、予言を主役にします。予言の存在を最初に示して、これからカードを徹底的に混ぜてしまうが、その結果がこの予言に書かれている、と明確に宣言します。

そのように演じた方が、徹底的に混ぜたことの面白さ、ひとつひとつの予言を見せていくという面白さ、そしてキッカーエンディングの魅力を強力に発散させると思えます。サイキックな演じ方は、それらの魅力を発散させるには適していないのではないかとさえ私は感じます。そのように感じるのは、私のマジックに対する嗜好からくるだけのことも知れません。しかしながらマジックを演じる上で、そのようなことを意識し、よく考えるということは、マジックのクオリティを向上させることに役立つと信じます。

時間のかかるカード当て

= 加藤英夫、2012年9月15日 =

“Card Magic Library” 第5巻、176ページに、’加藤のCATO’が解説されています。その作品は、ボブ・ハマーのCATO作品を出発点としたスティーヴ・フリーマンのバージョンに、Mr. マリックのアイデアが加わったものに、私のアイデアが加わったものです。

そのトリックでは最終的に4枚のAが他のカードと逆向きになって現れますが、逆向きに現すカードは何でもよいということから、それらを’シャフルボワード’的な複数の予言で現す、ということに適用できるわけです。そして最後に現すカードを、あらかじめ選ばせておいたカードと一致させるという、カード当てとのドッキングさせた演出といたしました。

* 準備 *

使用するノーマルデッキが青裏だとしたら、赤裏のデッキから16枚のカードを使いますが、つぎの7枚については裏面の左上と右下近くにドットマークをつけます。図1のように左上と右下の一部を削ってマークとします。

マークをつけるカード

7D、AC、6C、2H、JH、8S、QS

マークをつけないカード

5D、QD、2C、9C、3H、6H、10H、4S、KS

以上の16枚をよく混ぜてウォレットなどに入れておきます。

カードと同じ大きさの白紙に、つぎの予言を書きます。

第1の予言 表向きのカードが9枚あります。
第2の予言 黒いカードが4枚あります。
第3の予言 残りのうち2枚は同じマークです。

裏面につぎのように書きます。

最後の予言
残りの1枚が、選ばれたカードと同じです。

* 方 法 *

青裏のノーマルデッキからダイヤの7をクラシックフォースします。「そのカードを当てるにかなり時間がかかりますので、とりあえずこのカードはこちらに置いておいて、わかるまでこちらのカードを使ってマジックをご覧にいれます」と言って、ポケットからウォレットを取り出します。

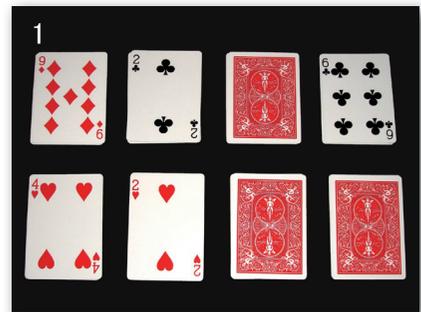
ウォレットからカードを取り出し、表向きに広げて見せ、「この 16 枚のカードを使います。まずよく混ぜていただきますよ」と言って、カードをそろえ、裏向きにして相手に渡し、よくシャフルしてもらいます。

シャフルされたカードを受け取り、「裏と表、でたために混ぜてしまいます」と言って、1 枚目を右手に取り、心の中で「表」と唱えます。そのカードのドットマークを見て、マークがなければ、唱えた向きのまま置きます。マークがある場合は、唱えた向きと逆の向きで置きます。1 枚目は「表」と唱えましたから、マークがなければ表向き、マークがあれば裏向きに置くことになります。

2 枚目のカードを取りながら心の中で「裏」と唱え、そのカードがマークがなければ裏向きに、まえに置いたカードの上に置きます。マークがあれば唱えたのと逆向きにまえに置いたカードの上に置きます。

このあと心の中で、「表」「裏」「表」「裏」と交互に心の中で唱えながら、マークがなければ唱えた向き、マークがあれば唱えたのと逆向きに置いていく、ということを最後のカードまで続けます。

「いま私が特別な混ぜ方をしたと思われるといけないので、あなたの指示によって、裏表の混ざり方を変えます」と言います。そして 2 枚のカードをテーブルにディーリングして、その隣りにさらに 2 枚ディーリングして、そのようにして 2 枚ずつ 4 組置いたら、先に置いた 4 組の前に、あと 4 組 2 枚ずつ置きます。図 1。



「このうちの 4 組をひっくり返します。まずどれか 1 組を指さしてください」と言って、相手が指さしたペアをその場でひっくり返します。あと 3 組指ささせて同じようにひっくり返します。それから 8 組を適当な順番で集めます。ゆっくり演じる時間のある場合には、相手に集める順番を指定させてもかまいません。

つぎは 4 枚のカードをディーリングして、4 枚ずつの組を 4 組作ります。「つぎは 2 組ひっくり返します。どれか 2 組指さしてください」と言って、相手が指さした 2 組をひっくり返し、4 組を集めます。

「最後は 8 枚ずつ 2 組に分けます」と言って、こんどは 8 枚を続けて 1 組に置くのではなく、左

右交互にディーリングして、8枚ずつ2組を作ります。相手にどちらかを指ささせ、それをひっくり返して他方に重ねます。

全体を取り上げて両手の間に広げ、「裏表でたために混ざりました」と言いますが、ダイヤの7がどちら向きになっているかを確認します。ダイヤの7が表向きなら、カードを閉じてひっくり返し、また広げて見せます。そしてカードをそろえます。

第1の予言を相手に読ませます。そしてディーリングしながら裏と表を分け、表のカードを数えて、予言が当たっていることを示します。表向きのカードを除外します。

第2の予言を相手に読ませます。残りの7枚の表を自分に向けて広げ、黒いカードを1枚ずつ抜き出して表向きに置いていき、予言通り黒いカードが4枚あることを示します。残りの3枚の表をちらっと見せて赤であることを見せます。黒いカードを除外します。

第3の予言を相手に読ませます。ハートの2枚を抜き出して見せ、予言通り同じマークのカードが2枚あることを示します。

予言の紙を取り上げて、書かれている面を観客に向けて、「これで予言が全部当たりました」と言います。そして紙の反対面に何か書かれているのを見つけた演技をして、「あれっ、もうひとつ予言があります」と言って、予言の紙をひっくり返し、最後の予言を読ませます。そして最後のカードを表向きにして、それからわきに置かれている青裏のカードを表向きにします。

「というわけで、時間がかかりましたが、選ばれたカードが当たりました」と言って終わります。

* 備考 *

このトリックは1組のノーマルデッキで演ずることもできます。その場合はつぎのような法則で16枚のカードを抜き出します。ダイヤの7をフォースしたとします。

デッキを表向きに広げ、ハートの7とダイヤの奇数の2枚、黒い奇数のカード4枚、赤の偶数のカード4枚、黒の偶数のカード4枚を抜き出します。

そして相手にこの16枚をシャフルさせたあと、パケットを表向きに持ち、「表」「裏」と心の中で唱えながら、偶数のカードの場合は唱えた通りの向きで置き、奇数の場合は唱えたのと反対の向きで置きます。

あとのやり方は同じです。

ランダムサンプルシャフルボワード

= サイモン・アロンソン、雑誌“マジック”、2003年8月 =

ジョン・バノンの'ウェイトアンティルダーク'では、予言ではなくサイキックにカードの状態を当てています。その理由をバノンは説明しています。予言で表現すると、「最初からそのようになるように決まっていたのではないか」と感じられるからだということです。

しかし観客がそのように感じるとしたら、同時に「ではなぜ、あれだけカードをでたらめに混ぜたのに、決まった通りになったんだ」ということも感じるはずです。

もしもバノンの予言に対する考え方が正道であるとするなら、この世にある予言マジックは、すべてバノンが言うような欠点があることになります。

しかし予言マジックには、“先に予言の存在を示しておいて、ランダムなプロセスのあとに発生したことが、予言の通りになった”という魅力があります。それは明らかに、サイキックに当てるといふ演じ方とは、魅力の質に違いがあります。

もちろん、サイキックな演じ方が好きな人、似合うマジシャンにとって、サイキックな演じ方が適切な演じ方であることを否定するものではありません。

さて私はこのあと、シャフルボワードの2つのバージョンの概略を紹介して、作者の意図について考察します。考察というよりも、揚げ足取りと感じられるかもしれません。しかしそれらは、「絶対に私が正しい」というスタンスで書くつもりはありません。あくまでも皆さんに考えを深めていただくために、私が疑問に感じたことを説明させていただくのです。まずはアロンソンの最新バージョンです。

アロンソンはこのバージョンの解説で、アリ・ボンゴバージョンにおける、予言の紙を広げていくことについてつぎのように指摘しています。

シャフルボワードがより不思議でスリリングなマジックに変身するのに、革命とも言える貢献は、アリ・ボンゴの提唱した連続的に予言を見せ、最後に紙を広げて決定的に予言を見せるというやり方です。

(中略)

ボンゴの予言のやり方は、1枚の紙を4回たたみ、全体の大きさの16分の1の大きさのものとしておき、1折らずつ広げて予言を見せていきます。ですから、まだつぎの予言があることを感じさせてしまいます。それは最後に大きく広がって最後の予言が現れるときの、インパクトを弱めています。

そのような理由を述べて、アロンソンはボンゴとは異なる紙のたたみ方を採用しています。それは小さな本のような形となり、最初のいくつかの予言は、同じ大きさのページをめくって見せていき、そして最後にいっぺんに紙を大きく広げて、最後の予言を見せています。

私はアロンソンがそのやり方を採用した理由を読んで、むしろボンゴのようにつぎにまだ予言があると感じさせてもよいと思いました。所詮ページをめくってつぎつぎと予言を見せても、まだ予言があるかもしれないと感じるのは同じです。どうせそうなら、紙が次第に大きくなっていくこと自体に面白さがあります。

同じ大きさのページがめくられていたのが突然大きく広がるが、どうして素晴らしいのでしょうか。次第に広げられていくから、それがサスペンスを盛り上げてくれるのではないのでしょうか。

ちなみに、アロンソンのこのバージョンにおけるシャフル操作は、彼の原案の3つのパイルに分けるやり方ではなく、2人の客にポケットを持たせ、半分カットしてひっくり返して交換し、それらをシャフルさせるというやり方です。すなわち、ハリー・ローレインが初めて採用したやり方です。

ボワードオブシャフリング

= ウッディ・アラゴン、"アブックインイングリッシュ"、2011年 =

ウッディ・アラゴンのこのバージョンでは、客が最後に一方の組をひっくり返して他方とシャフルするとき、どちらをひっくり返して行っても、デッキをひっくり返して予言カードのある方を特定の方に向ける、ということが必要ないように構成されています。予言の文言はつぎの通りです。

表面

THERE WILL BE 24 FACE UP CARDS
11 OF THOSE WILL BE RED
6 WILL BE HEARTS
ALL OF THE HEARTS WILL BE NUMBER CARDS,
NO PICTURES.

裏面

EXCEPT FOR THE K
J OF HEARTS.

この予言がどちらの場合にも通用するように、デッキから2枚の赤いQと2枚のダイヤのカードを除外した48枚を使い、どちらの面を上に向けても、表面の予言の通りになるようにして、最後の1枚は同一のカードを使えませんから、KとJを振り分け、裏面の予言を見せるときに、Kの文字かJの文字を指で押さえて見せるのです。

私はこのバージョンを読んで、シャフルさせたデッキをひっくり返さないことが、そんなに素晴らしいことだろうかと思いました。むしろデッキを両手の間に広げて、一方の面の混ざり具合を見せたあと、ひっくり返して反対面を広げて見せて、まったくでたらめに混ざっているのをみせるのは理にかなっていると思うのです。

このアラゴンの考え方は、アル・ベイカーの言う、「追われずして逃げるなかれ」という名言が、トリックのクリエーションについて当てはまる例だと思います。

このようなことを考えてくると、私はアリ・ボンゴのバージョンがたいへん素晴らしいバージョンであると思うようになりました。ちなみに後日、カール・ファルブズの雑誌“オフザスブックス”に、アリ・ボンゴバージョンが書かれているのを見つけました。'UNFOLDING FUTURE'(未来を開く)というタイトルでした。

*** 余 談 ***

この特集を締めくくるにあたって、サイモン・アロンソン著「トライジインポシブルより、アロンソンとジョン・バノンのインタビューの一場面を紹介いたします。

アロンソン

本を世に送り出すというのは、自分の子供を大学に送り出すようなものです。子供は親によって育てられますが、家を離れたあとは、彼は新しい環境で学んでいきます。

私は作品をじっくり育て、その作品には私らしさというものがあると思っています。そしてある時点において世に送り出します。私の手から離れるやいなや、それらは他のマジシャンたちによって育てられることとなります。

彼らはそれらと取り組み、人々に演じて見せ、それぞれのパーソナリティにアジャストし、そして発展させるでしょう。我が子が自分の手から離れていくという感傷もないわけではありませんが、自分の作品を人々に愛用してもらい、フィードバックしてもらえるというのは、クリエイターとしての喜びであるのです。私がボールを投げて、それを受け止めた人がゴールにタッチダウンを決めてくれた、そのような喜びです。

バノン

ということは、あなたが作品を世に送り出したとき、それらはまだ未完成だということですか。

アロンソン

私のおよぶかぎりでは、それらは完成したものです。しかし私の経験によれば、どんなものにも必ず改良の余地があるものです。考え方の違う人間は、物事に違う角度からアプローチするからです。そして何らかの価値あることを付け加えてくれます。

たとえば、「シャフルボワード」は私が誇る作品ですが、連続的な予言で表現するというやり方を見つけてくれたのは、アリ・ボンゴです。これは原案を発展させる偉大な発見です。私の作品をそのように発展させてもらえるというのは、本当に嬉しいことなのです。

これだけの会話ではありますが、クリエイターの私にとっては心にしみるものです。お互いの考えを尊重すること、そして素晴らしいカードマジックが育っていくこと、その上で正しいクレジット記録を残していくことの大切さも感じさせるものです。

加藤英夫のホームページ

<http://www.magicplaza.gn.to/>

Card Magic Magazine 第 23 号

発 行 2014 年 3 月 7 日

著 者 加藤英夫

発行者 加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp

